
アンタイトルド・ライト・パルプ

鱈橋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンタイトルド・ライト・パルプ

【Nコード】

N3335Y

【作者名】

鱈橋

【あらすじ】

取り留めもない習作。

ライトノベルが主な蔵書の読書喫茶。
奥のスタッフルームの扉を開けると、そこにはファンタジー世界が広がっていた。

リアリティ・ライン

無駄話をしよう。

リアリティ・ラインという言葉がある。おもに脚本家の間で使用される言葉だそうだ。

意味としては、作品におけるリアリティの水準のことを指している。

たとえば大きな爆発があつて、人が巻き込まれたとする。

巻き込まれた人間が、すすだらけの姿で立ち尽くし、髪の毛をチリチリに乱し、口から煙を吐きながらも生命には別状がないとする。その場合、作品はおそらくコメディであり、ちよつとやそつとでは人の死なない世界観である。現実とリアリティ・ラインはかなり離れている訳だ。

では爆心地にいた人間の四肢が飛び周囲に内蔵が散らばつていれば、かなり現実味がある世界観となる。リアリティ・ラインは現実に沿った形になる。

リアリティ・ラインはいわば観客の視線を決める座席のようなものだ。安心して作品を楽しむためには安定した椅子が――リアリティ・ラインが必要だ。左右に揺らぎながらでは、まともにスクリーンを見ることはできない。

たとえば主人公がタイムトラベルの能力を持ったSFがあるとする。時間を自分の思い道理にする様が描かれる。しかしその直後に主人公が「学校に遅刻してしまう」と焦り出したらどうだろう。どうかんがえても矛盾が生じてしまう。リアリティ・ラインが不安定になり、見ている側は椅子の揺れに気づき、とたんに現実に引き戻されてしまう。

つまり良質な作品は安定したリアリティ・ラインが必要不可欠なのだ。

ようやく富士野の長々しい講釈がおわった。俺はため息を吐きながら問いかける。

「で、その話と、今のこの状況がどう関係してくるんだよ」

「良い質問だね立原くん。要するに我々の認識していたラインを逸脱している光景だということだよ」富士野はそういつてドアの向こうを指した。

ここは寂れた喫茶店の店内で、扉を開けるとスタッフルームにながっているはずだった。

しかし、ドアの向こうには、いつもの見慣れた光景はない。部屋にこもって本を読みふける店長も、本棚からあふれた書籍もありはしない。それどころか室内ですらなかった。

察するにファンタジーである。雄大な草原の先には巨大な山脈が見える。それだけなら北欧の景色とも見えなくはない。しかし山頂には現実世界としてはありえない生物が鎮座していた。

ドラゴンである。遠目にみてもそれとわかるシルエットだ。黒々とした翼を休め寝息を立てている。

「とりあえず」富士野はメガネをかけ直し、ドアを閉める。「見なかったことにしよう」

伏線

伏線とは、作り手側の優しさだと思っわけだ。

冷たい人間はお近づきになりたくないし。これ見よがしにいい人ぶって優しさをひけらかすのも感心しない。

たとえば、なんの前フリもなく実の父親が死神だったなんて藪から棒にいわれてしまうと、受け手としては突き放された感覚になり、コミックス購入を断絶してしまうも無理からぬことだ。

だからといって、何でも思わせぶりに前説を入れる必要はない。ミステリーで容疑者全員が含みのある人物だとやかましくて仕方がない。

「優しさが足りないな。前フリがなさすぎる。起こった事象が突拍子もなさすぎて考察しようがない」富士野はカウンターに入りコーヒーを入れ始めた。

俺は、カウンター席に腰を落ち着けた。

「確かに、平穏な日常に超現実的なことが起きるなんて、期待はしていても予想はしないからな」俺はそういつて、スタッフルーム、通称引きこもり部屋に目をやった。

ここはただのコンセプト喫茶店だ。いわばマンガ喫茶の小説版、おちついた雰囲気で文章を読んでもらおうという空間だ。ただしおいてある本は店長の趣味によって八割がたライトノベルとなっている。窓側にも書棚をおいてあるせいで店内は薄暗い。そして奥にあるのが店長の引きこもり部屋。店長用の安楽椅子、店員用の長いすがおいてあり、それ以外のスペースには無数の積み本がおかれている。古本新刊借り物あらゆる本が本棚からあふれだし床に積み上げられている。一部は人の身長をも超していて、依然倒れたときには

店長の搜索隊を編成する騒ぎになった。

そして、いまそのスタッフルームが異界への扉と化していた。

富士野はブラックコーヒーを一啜りして、もったいぶった口調で切り出した。「それで我々はどう行動しようかね立原くん」

「見なかったことにするんじゃないかったのか？」

「そういう分けにもいかないだろう。店長の無事も気になるところだし。あと、コレは些細なことだが今週分の給料をもらっていないのも気がかりだ」

「文字どおり現金な物言いだな」

「人助けはいいことだよね立原くん」富士野はカップを置くと、二杯目を継ぎ足した。

「じゃあ、ドアの中に入るのか」俺は席を離れ、ドアの前に立った。戸惑いながらもノブをひねり、手前に引く。

草原だ。先ほどの景色は夢幻のたぐいではなく現実のようだった。店内に清涼感のある草原の空気が流れ込んだ。俺はゆっくりドアを締める。遠くで得体のしれない生物の鳴き声が聞こえた気がした。

「俺にもコーヒー、もらえるか」

富士野は無言で新しいカップを手にとって、デカンタからコーヒーを注いだ。

「なあ、アレは一体何なんだ」カウンターに座りカップを手にとつてぼんやり中の液体を見つめた。

あまりの現実離れした光景に、取り乱すよりも、呆然としてしまった。脳が処理能力を超えて熱暴走してしまったように妙な浮遊感をこめかみのあたりに感じた。

「とりあえずだ。僕らの常識では計り知れないということだけは、確かだろうね」富士野は達観したような表情をしている。「ここは普通の喫茶店だが、ドアの向こうには、ファンタジーな世界が広がっている。そして恐らく店長は向こう側に居る」立ち上がる富士野、嫌な予感がした。「となると、取るべき行動はひとつだね

富士野は強引に俺のうでを掴むとドアの方へと引きずっていった。

「人助けはいいことだよな」

「お前、楽しんでないか」

「男は度胸、何でも試して見るものだよ」

富士野はドアを開くと躊躇なく草原への第一歩を踏み出した。

動機付け

動機付けは重要だ。人物の動の大部分を決定付け、物語の運びようを定めてしまう。それに、動機に共感できなかった場合、人物の好感は著しくそがれる。それが主人公であつたときなどは作品自体が嫌悪される可能性もでてくるわけだ。

一口に動機といっても、いろいろなものがある。生存本能であつたり、物欲であつたり、生理的欲求であつたり。

個人的に文句の付けようがないのが、子を守ろうとする母親。これを出されたらぐうのねもでない。愛する子供のためならどんな行動も許される。序章で親子の絆を丁寧に描いていたら、最後までなにやってもOKだ。

さて、いきなり出現したファンタジー世界に迷い込んだ青年の行動の規範となる動機とは、いったい何なのだろうか。

「どうしよっか、これから」富士野はあたりを見回しながら、俺に尋ねる。

目の前には草原、背には森が広がっている。俺たちのでてきた扉は、不自然にも木のうろに通じていた。端から見るとただの老木なのだが、うろのなかをのぞくと、ドアノブがついている。試しにあけてみると、見慣れた喫茶店に通じていた。どうやら自由に行き来できるしよらしい。「考えなしに引つ張り込んだのか。平穩なる日常から、何の強制もなしに怪異へ身を投じるなら、それ相応の動機があるんだろうな」

「人助けだよ。店長の救出にさ」何かを見つけたのか、富士野は突然歩き出した。

俺はため息をつきながらも、後続く。「たかだか、一ヶ月働いただけのバイト先の店長のためにしては、リスクが大き気がするんだが。喫茶店から出ることを強要されたわけでもないのに。わざわざ

ざこんな所に来るのはおかしいだろ。何が起るかもわからないし、何が得られるのかもわからないだろ」

「たしかに動機不十分という意見も最もだ。喫茶店にとどまっていたほうが、安全だったろうね。身の危険への対応が、生物的には一番の行動原則になるだろう。でも人間はそれだけのために動くとは限らないよ」富士野は屈んで地面を見つめる。

「じゃあ、なんのためにここに入った？いや出たになるのか？もう分けがわからん」

富士野の目線の先には、何か車輪のようなものが通ったのか轍ができていた。

「かなり共感を呼ぶ動機だと思うよ。つまり、好奇心さ」富士野は趣味の悪い笑い方で草原の先を指さした。「取り敢えず、街に行こうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3335y/>

アンタイトルド・ライト・パルプ

2011年11月14日03時10分発行